芸振

大分県芸術文化振興会議

No.74　63・10

■発行人：挾間正年　■編集人：小代基雍

もくじ

ずいそう……1
（特別企画）
芸振、25周年を迎えて…2～3
さざ波……4
加盟団体の活動……5
シリーズ会員通信④わたしは今……5
芸術文化基金海外派遣者座談会……6
芸術文化基金海外派遣事業帰国報告……7
事務局だより……8

『芸術・文化のピラミッド』

大分県芸術文化振興会議
事務局長
小代基雍

異常気象が続いた今年の夏も終りに近い８月25日、大分県芸術文化基金事業の一環である学校巡回に、挾間芸振会長にお伴をして本耶馬渓町へ行った。出演団体は、団員約100名からなる大分市少年少女合唱団である。午前の部は西谷小学校の体育館に児童とＰＴＡ、それに地域の方々も大勢集まり、加えて先生方の熱心な指導もあって心温まるものを感じた。児童の瞳は明るく、どこまでも澄みきっており、合唱団のきれいなハーモニーに聴きいっていた。さらに嬉しかったことは、お年寄りや子供連れのお母さんの姿が見られ、いわゆる地域ぐるみの参加があったことである。午後は会場を本耶馬渓中学校に移し、町内５つの小学校も加わり約400名位になった。合唱団は午前の部にもまさる熱唱ぶりで、深い感動を与えてくれた。この度の巡回公演で感じたことは、まず第一に出演団体と聴衆の児童生徒との意気がぴったり合っていたことである。両者の気持ちが通じ合い、それこそ一つのハーモニーを醸し出したことである。第二に、大分の中央部と地方の人々が短時間ではあったが温かい交流が出来たことである。今後ますますこのような時と場をいろいろな側面で創り出して行くことの必要性を痛感した。そして大事なことは、芸術や文化について多くの人々が一緒に鑑賞し、ともに感動し、語り合い、感性を磨いて、一人ひとりの心の豊かさや充実感を体得して、その輪を拡げていくことだと思う。

さて、恒例の県芸術祭は24回目を迎え、10月１日に杵築市民会館での開幕行事を皮切りに、11月末までの２か月間にわたり秋を彩る芸術文化の各種行事が県下各地で展開される。本年は県下58の全市町村が参加し、行事数も158となり、両者ともに過去最高となった。来年の第25回の節目を前にその盛り上がりは頼もしい限りである。このように底辺の拡がりが大切であることは勿論であり、「……、木あるが故に尊し」といわれる如く、今後は内容の充実深化に目標を定め、地域性を活かし、個性のある行事を全員参加の意識を基盤として、心の豊かさへとつないでいくような時機が来ているものと思う。

さらにまた、各地域の文化行事を、年間を通じて系統的、組織的に計画実施していくためには、各市町村単位に文化協会なり文化連盟なりの機構が不可欠であり、それが核となって、郷土に根差した文化活動を行ってこそ本ものであり、皆んなが求めているものではないだろうか。一極集中から地域分散は時の流れであり、各市町村単位の文化協会結成促進は、今年度の芸振事業の強調項目の一つでもある。

芸術文化のピラミッドを考えて見るとき、その底辺と頂点のつり合いが問題である。全員参加の意識、態勢をもつことによって底辺の拡がりをみせ、「継承と進取」の精神を軸に、個性化、地域化を活かした内容充実によって頂点（高さ）が築かれていくものと思う。底辺だけが長くても、また頂点が高いだけでもそれは偏っており不恰好である。それぞれの地域や内容にあった底辺と高さのつり合いを考え安定感のある美しいピラミッドを創造して、芸術文化の歴史を積み重ねていかねばならないと思う。

（文化課長）

斉藤庸寛氏のデッサン・少女

今年は'88ソウル五輪の年、芸振が発足したのは24年前、奇しくも'64東京オリンピックの年だった。この年は、東海道新幹線開通が象徴するように、日本の高度経済成長の一つの頂点であった。やがて70年代に入ると、経済発展に伴う種々のひずみが世界的に問題視されるようになった。文化や教育がその視点で見直され「生涯教育」の波が世界中に広がったのもこの頃である。

私が芸振の事務局長に就任したのは、この70年代の入口、昭和45～46年度であった。芸振はその時、5年という節目を通過し、一つの転換期に差しかかっていた。それまでの芸振は、芸術祭の企画・実施が主な目的であったが、もっと幅広い活動―美術館、劇場、音楽ホール等の建設促進、一般県民の芸術活動の拡大発展、特に地方文化の向上etc……の展開が求められるようになっていた。それまで芸術家や一部の芸術団体のサロン的色彩の強かった芸振は、県民的芸術文化活動団体としてより幅広い団体に体質改善せねばならない時期になっていた。これは内なる要求もあったが、外からのインパクトが強かったことは否めない。というのは、昭和43年文化庁が発足したのに伴い各県は文化行政を社会教育行政から分離独立させる↗趨勢にあった。また国の政策として各県に総合的芸術文化団体を育てるという働きかけもあった。だから半官半民というささやきが聞こえたのも事実であった。私の考えでは、芸振に十分な自主財源があれば○官十民が理想的だが、それが不可能ならばせめて三官七民であるように行政担当者としては心掛けたいということであった。誰かが県内文化団体に「○○教育事務所管内」という分類をしていたのを起案書に見つけ、そういうオフィシャルな感覚で芸振にかかわるのでは、芸振の事務局員は務まらないぞ、と厳しく指摘したことを懐しく思い起こすのである。

今思えば、昭和45～46年は、活々とした行動力を持つ芸振に発展させるべく、スタッフや関係者が昼夜を分かたず新鮮な情熱を燃やした時期だった。その討論の中から、規約の抜本的改正、「文化年鑑」「芸振」の発刊、芸術祭行事の地方化等が実現していったのである。

芸振のかかえる諸問題は、常に古くて新しいものばかりである。上記の自主性を堅持する問題もさることながら、当初からあったプロフェショナリズム重視かアマチュアリズム尊重かという問題も、今後さらに検討されなければならないだろう。

いずれにしても「初心忘るべからず」である。

特別企画　芸振、25周年を迎えて

儚い夢

大分県洋舞踊協会会員
平瀬　克美

第７回県芸術祭開幕公演　白鳥の湖（昭和46年）

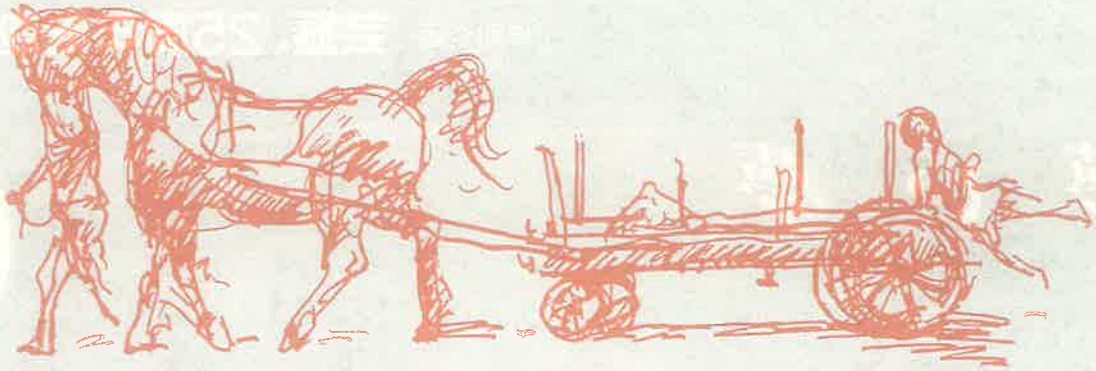
昭和39年、「大分県芸術文化振興会議」という耳慣れない長い名称の会が発足した。協会でもなく連盟とも異なり、いわゆる文化団体の集合体ではない、ということでこの名称となったと覚えている。その名称にふさわしく、まず事業として「県芸術祭が企画された」「参加団体があるだろうか」とか、「開幕行事をどの団体にしようか」と案じて始めた芸術祭も今年は24回目、その発展ぶりに驚いている。

芸術祭といえば、私事ながら忘れられないこと、それは第７回開幕公演をしたことだ。まず話があった時、協会員は「やれるものか」と思っていたのが「やって見ようよ」にかわり、「みんなで力を合わせて」を合言葉に猛練習をした。バレエ作品の中でも超大作、「白鳥の湖〟の本舞台で、カーテンコールが終わり、緞張が降りた途端、みんなかけよって抱き合って涙した感激は忘れられない。これも芸術祭のお陰だと感謝している。

また、芸振会議や芸術祭のおかげで、多くの素晴しい方々との出会いと別れがあった。中でも、この会の発足当時の役員、故溝辺有巣、佐藤義詮、藤沼恵、米田貞一、辻英武の諸先生方と私、今では皆様故人となられ、私一人、先生方との思い出だけで淋しさをまぎらわしている。ご冥福をお祈りする。

さて、先般ソウルオリンピックの時の事だ。開幕、閉幕をテレビで見ている中に、ソウルのあの大舞台が、私の心の中で、いつしか大分の総合グラウンドになり、韓国の歌が日本の民謡となり、〝一市町村・一芸能〟のタイトルが浮び、地方芸能が次々に現われる。その中、舞台は総合体育館に移り、特設ステージにライトが輝き、各種芸能が披露される。まさに〝大芸能フェスティバル〟だ。こんな夢が描けるのも、私がかつて芸振会議に少しだけたずさわり、芸術祭に参加したお陰だ、とありがたく思っている。儚い夢でもいい。これからもずっと、こんな心の弾む楽しい素敵な夢を描き続けて生きて行きたい。

（元大分県洋舞踊協会長）



さざ波

舞台創造・苦楽の味

県民演劇代表　**中沢 とおる**

県民演劇初演作「沈んだ島の物語」（昭和48年県芸術祭参加行事・文化会館・芸術祭賞）のパンフレットで、私は「大分弁を誇りたかく使いたい」とかいた。手前味噌かもしれないが、それまで大分弁は、芸術文化の分野で小さくなっていたような気がする。それから16年、私たちの創ってきたオリジナル作品は、つねに大分弁を満載してきた。地方文化のありようが全国的に問い直され、その中で地方弁の位置が再認識されてきた。NHK教育テレビのシリーズ授業で、米倉斉加年さん（民芸）が「生命が生きている地方弁がしゃべれて共通語をしゃべることが大切、それが生きている言葉だ」といっていたが、嬉しかった。

私たちの劇団は、昭和初期、東京の築地小劇場を根拠地にして発展した新劇の流れを手本に勉強している。演劇の理論と実践を統一的につかむ勉強は、発声肉体の訓練を軸に大変な苦労である。その中で大分弁をしゃべる訓練が難しい。合↗格者は末田英三、羽田野文幸の両君だけ。今年の作品「荷馬車のある風景」（首藤三郎原作）は大分弁が痛快な舞台だけに、若手はお手あげ。ふるさとの言葉が満足にしゃべれないとは、まさに非文化である。

瓜生島、大友宗麟、山弥長者、前野良沢、江口章子、緒方三郎惟栄、広瀬武夫、それに臼杵石仏など、郷土の歴史、人物に新しい照射をあてた作品は、大分の文化を積み重ねる仕事の上でいくらかのお手伝いをしたが、ずいぶん勉強をした。

チケットを買って観にきていただく観客にとって、舞台は楽しいことが不可欠である。でもそれが文化であるためには、なにを創り、どのように表現するかという深い創造的苦労がいる。料理はつくるものの苦楽の味があってこそおいしい。楽しむだけでは文化は滅びることを、イソップも「アリとキリギリス」で教えている。

（芸振常任理事）

カットは、広瀬通秀氏による「荷馬車のある風景」

加盟団体の活動

みんなうたが大好き

大分市少年少女合唱団

８月25日、本耶馬渓町での学校巡回公演

═══ 昭和63年10月０日　練習風景═══

ＰＭ２：00～Ｋ先生のピアノ伴奏が流れる。

「ミュージカル11ぴきのネコ」の練習開始

○指揮者　高森先生の叱咤が飛ぶ！「せりふの声が小さい！もう一度初めから！」

○学　生　Ｋさんキーボードでメロディー担当

○学　生　Ａさん・Ｙさん～バックコーラスのパートに入り発声指導。

○育成会のお母さん方はネコの衣裳つくり、デザイン帳を手に「アアデモナイ、コウデモナイ！」とケンケンゴウゴウ！

以上が来年１月に第６回定期演奏会を開く団活動のスナップである。

６年前に「合唱をとおして豊かな心を育てる」ことを目的として団を結成し、本年は学校巡回～本耶馬渓町、昨年は全国大会～福岡市に出演し、安西愛子先生から「質量ともに本格的な合唱団！」とのお言葉を頂いた。

団員数大分市内の小・中学生 101名、育成会の父母90名（９月１日現在）。練習は毎週土曜日の午後県立芸術会館で行っている。

新シリーズ④
会員通信

わたしは、今

新しい文化の芽を育てる

村岡　嵯一

私と芸術文化のかかわりは、県社会教育課で勤めた昭和42年である。その年、文化会館で松方コレクションを催し、その益金を基に美術館建設基金に、またその後新しい企画で発足したのが現在の芸術文化基金であり、今は懐かしく回顧する日々である。

私たちの故郷は古い文化と歴史を持ち、その風土と伝統に培われ多くの芸術家を生み活躍している人は多い。その反面、若者が芸術の道を志し、それぞれが専門的に学びながら地方に帰ると地域での文化活動の地盤が乏しく、若い芸術の芽が埋もれがちである。私は20数年間芸術文化行政に携った者として今こそ埋もれた若い芽を育てなければと思案し、昨年から情報の収集にかかり、音大出身の娘を３人ほど発見し、それぞれの持ち味を生かして本年度の大分県芸術祭開幕公演に出演させることができた。このことは、私にとっても大きな喜びであった。しかし、やはり難しいことであることも強く感じたが、この努力は今後も続けたいと考えている。

海外派遣者座談会

芸振会議は、文化基金の海外派遣事業の研修者による座談会を、去る８月26日、県立図書館ホールで開催した。

この座談会は、芸振会議発足25周年に当たり、今年度の派遣者が決まったのを機に、過去の派遣者と海外研修について、話し合ってもらうため、初めて開催したものである。

まず、挾間会長が、今年度派遣する二人に対して、この海外研修でおおいに見聞を広め、今後の活動に活かしてもらいたいとあいさつ。続いて、小代事務局長が、この座談会は、これからの海外研修制度の充実に役立てるものであるとあいさつ。

座談会は、菅久常任理事(広報担当)の司会で進められ、楽しかったこと、辛かったこと、留守宅のことなど研修中のよもやま話しをはじめ、それぞれの国の文化事情や研修成果、これから行く者に対するアドバイス、さらに、この制度への要望について、出席者から貴重な意見等が披れきされた。

その主な内容は、次のとおり。

研修先である中国やオーストリアそれにドイツは、それぞれ書道や音楽のメッカだけに、想像以上に素晴しいものがあり、充実した研修ができ、今後の自分たちの活動にとって、非常に有益であった。現地での研修は、まさに「百聞は一見にしかず」で体験した者でないとその良さは理解できないのではないか。ただ、言葉の障壁がクリアできれば、さらに成果が上がったものと思う。語学の勉強を含め事前準備にもっと時間をかけるべきだったという反省点や通貨の問題、事故に備えての保険の問題あるいは公的機関としての派遣証の交付、さらに派遣内定を２、３年前に行うとか現職教員などに対する服務上の便宜等々、事務局に対する要望が数多く出された。

それから、今年の派遣者２人からは、研修についての決意が表明された。

最後に、小代事務局長は、今日の座談会における貴重な意見をこれからの海外派遣制度の運用に活かしていきたいとお礼を述べ、なごやかな内に座談会を閉じた。

座談会出席者

氏　名	研修地	期　間	研修内容	備考
河　村　又一郎	中国(北京,洛陽,西安,上海等)	S60, 10／18～S60, 11／15	現代の中国における書法の実態調査研究	60年度
牧　泰　正	中国(北京,桂林,上海,西安等)	S61, 8／19～27 S62, 3／27～4／1	王義之を中心とした中国書道史の研究	61年度
辛　島　光　義	オーストリア(ウィーン)	S61, 9／27～S61, 11／30	音楽演奏の研修と鑑賞、音楽教育の体系研修と演奏ルーツの研究	61年度
林　フミヨ	東ドイツ(東ベルリン)	S63,3～S63,5	バロック音楽の研究 バロック音楽作品のフルート奏法	62年度
久　間　紘一郎(芸名 小袋 丹)	アメリカ(ニューヨーク)	S63, 9／15～S63, 9／30	現代演劇のシステムとその実際について	63年度
佐　藤　朱　音	ソ連(モスクワ,レニングラード)	S63, 12／25～S64, 1／15	ロシアバレエとクラッシックバレエの技法について	63年度

〈事務局〉 挾間正年(会長)・菅久(常任理事)・狭間久(理事)・小代基雍(事務局長)・中野幸和(事務局次長)・野村幸雄(事務局員)ほか

62年度 海外派遣研修帰国報告

私の音楽留学

林　フミヨ

幸にして、私は「大分県芸術文化振興会議」の昭和62年度海外派遣員として、海外留学のチャンスがあたえられた。

留学先としては、私のライフワークとしているBachの勉強をするために、Bachが生まれた東ドイツを選び、東ベルリンの「ハンス・アイスレル」音楽大学に留学することとなった。

ドイツ語も3か月の特訓を受けただけで、英語も満足でない私の1人旅に、まわりの人々は随分心配したようであるが、楽天家の私は、「行けばどうにかなる」と、自分自身に言いきかせ、2月29日、日本を発った。

東ドイツでの勉強は、私がドイツ語が出来ないこと、留学期間が短いこと、宿舎が不便なこと等の為、途中で、断念し、西ベルリンへ行くことにした。西ベルリンには日本からの留学生が30人位滞在している。音楽の留学生の多くは東京芸大の出身者で、ピアノやバイオリン、コントラバスなどを勉強しており、私は、そんな留学生の1人のアパートに同宿させてもらい、ここを中心にして3か月間の勉強や旅行をした。

フルートの個人レッスンを、ベルリナー・フィルハーモニー交響楽団フルート奏者であるジョアンナ・カスナー先生にうけ、ひまをみては西ベルリンと東ベルリンで毎日開催されるコンサート、オペラ、教会コンサート等、たくさんの音楽を聞くことが出来た。

個人レッスンで特に新しい勉強としては、音の作り方で2つの音を合わせて新しい一つの音を作る練習、特訓で高度の耳とテクニックが要求されるレッスンであったが、良い勉強となった。

ベルリンでは、毎日毎日たくさんのコンサートやオペラが上演されており、鑑賞としての勉強でもまた忙しい日々であった。日曜日などは朝から教会コンサートがあり、1日で、4つのコンサートを聞くこともあった。色々な演奏が色々な人や方法で聞くことが出来たが、それに劣らずすばらしいのがコンサート・ホールとオペラ・ハウスであった。大きいホール、小さいホール、そして、オペラ・ハウス、どれも美しく、豪華で、歴史の古さと、国の音楽にたいする援助の大きさを感じた。また、人々の聞く耳の確かさにおどろき、優雅で華やかな雰囲気を楽しむ人々の姿に感心した。

特に、印象に残るのは、カラヤンの率いるベルリン・フィルを二度聞き、ヘンデルの「マタイ受難曲」の全曲を4時間かかって聞けたことであった。

留学の成果としては、フルートの実技指導がうけられたこと、本場のコンサート、オペラ等が見られたこと、社会主義国と資本主義の国が見られたことであり、反省点としては、語学の勉強をしっかり準備すること、諸準備に十分時間をかけてすることなどである。

今回の研修を通して、感じたことは言葉が通じなくても人間お互いに一生懸命に取り組めば、親切に温かく接してくれるということを改めて知り得たことである。

（グループＵＮＯ主宰者）

1988.3 西ベルリンにて

新理事に

藤原、堀内、三苫、湯原の四氏

― 昭和63年度芸振総会開かれる ―

昭和63年度の芸振総会が、6月10日、県大分総合庁舎で開かれ、62年度の事業、決算の承認と63年度の事業計画及び予算が原案どおり承認された。

また、今年は役員改選の年に当たり、挟間会長などの再任とともに、新しい理事に藤原嘉久、堀内聰、三苫勇、湯原恭子の四氏を新任した。

なお、総会の前に開かれた理事会で新たに、三保の文化財を守る会、大分県新舞踊連盟の2団体の他、邦楽の鶴田恵子氏など個人23人が加入承認された。

"文化年鑑"創刊20年記念号の発行計画決まる

『文化年鑑』は、芸振会議の組織や活動状況などをわかりやすく説明するハンドブックの役割を持ち、会員に重宝がられている。この年鑑は、1969年（昭和44年度）を第1号として刊行され、今年の'88年版で通算20号目を迎える。

先に開いた編集委員会（編集長 菅 久 常任理事）でこの'88年版を記念号として130の加盟団体のプロフィールを紹介するなど特色を出していくことを決めた。現在、各団体に原稿の照会を行っているところで、正確な原稿を期待している。締切日11月21日、提出先は

〒870-01 大分市大字葛木509 県立鶴崎工業高校
菅 章 あて

昭和63年度基金事業

●学校巡回公演

期日 月	期日 日	期日 曜	町名	会場	公演団体	開演時間	備考（児童、生徒数）
7	12	火	大野町	大野町立東部小学校	大分大学 コール・レティッヒ	AM 10:30	117名
	14	木	久住町	久住町立久住小学校	〃	PM 0:30	153名
	15	金	〃	久住町立都野小学校	〃	AM 10:30	129名
	17	日	直入町	直入町中央公民館	大分県庁職員吹奏楽団（グリーンサックス アンサンブル）	AM 10:30	長湯小 147名 下竹田小84名
	〃	日	〃	〃	〃	PM 1:30	直入中 137名
8	25	木	院内町	院内町立院内中学校	大分県洋舞踊協会	AM 10:30	南部小 105名 中部小 183名 上院内小19名
	〃	〃	〃	〃	〃	PM 2:00	院内中 251名 北部小 113名
	25	〃	本耶馬渓町	本耶馬渓町立 西谷小学校	大分市少年少女合唱団	AM 10:30	54名
	〃	〃	〃	本耶馬渓町立 本耶馬渓中学校	〃	PM 2:00	187名

●文化キャラバン

期日 月	期日 日	期日 曜	町名	会場	公演団体
10	30	日	蒲江町	蒲江町中央公民館	グループUNO
〃	〃	〃	山国町	山国町福祉センター	県庁職員吹奏楽団

●ファミリー芸術劇場

期日 月	期日 日	期日 曜	市名	会場	公演団体
12	4	日	日田市	日田市民会館	大分県県民オペラ協会

機関紙『芸振』のイメージチェンジ

芸振会議は、昭和39年の結成から今年でちょうど25周年を迎えた。芸振会議の機関紙"芸振"も25周年の節目を機会に題字を変えることにした。

なお、創刊号は、昭和45年8月であり56年3月の50号までを**平田暘邸**氏、56年7月の51号から63年3月の73号までを**野田南圃**氏の揮毫である。今回の74号からは、**首藤春草**氏によるもので、同氏は素朴さ、強さ、動き、明るさを『芸振』の二文字に表現したかったと言っている。